『近代スポーツ批判』の方法について

関 春 南

はじめに

私がここで検討しようとしていることは、「近代スポーツ」を批判し、新たな運動文化を創造しようとする場合の、その方法上の問題についてである。何故現在このことを問題にするかといえは、いつでも、どこでも、だれでも、スポーツのできる状態の実現を、という課題、つまり「国民スポーツ」の実現が今や共通の国民的課題になってきており、その中で、具体的現実的課題として、「国民スポーツ」の内実の明確化が求められてきているからである。このことは、理論上の問題としていえば、「スポーツ」をどう捉え、どう継承・発展させていくべきか、あるいは、「スポーツ」と国民との新たなかかわり方をどう創造していくべきか、という問題にほかならない。

この問題に対するこれまでの研究上の蓄積は、特に民間体育研究団体である学校体育研究同志会によってなされてきた。従って、研究上の蓄積を明らかにするために、学校体育研究同志会の主張している「運動文化論」の全面的検討を必要とする

が、ここではその端緒として、会の委員長であり、理論的・実践的に精力的な活躍をされ、体育界に多大の影響を与えておられる中村敏雄氏の論にかぎり、そのうち「スポーツをどう捉え、どう継承し、発展させていこうとしているか、その方法には如何なる問題点があるか」という点にしばって検討してみたい。

検討の対象とした文献は、主著『近代スポーツ批判』（一九六八年）をはじめ、『ビジネススマンの体力』（七〇年）、『スポーツとは何か』（七三年）他、雑誌『体育科教育』、『体育の科学』、『学校体育』及び機関紙『体育グループ』などに発表された主要論文約四〇編である。

以下できるだけ氏の発言内容に即して論点を整理し、問題点を明らかにしていきたい。

* この点の現状分析については、拙稿『国民スポーツ』の発展のために『体育科教育』一九七五年八月号参照。

一 「スポーツ」をどう捉えているか

まず、中村氏が、批判の対象である「スポーツ」をどのような捉えているかを明らかにしたい。

氏は、今日「スポーツ」をすることは、人間的な行為であり、人間らしく生きていく上での権利、つまり生存権の内容をなしているが、現実には、「スポーツ」のこうした人間的なものを「だれもが」享受できるようになっていないという状況を次のように説明する。「私たちは学校体育実践の中で、へたなものや弱いものが、バレーボールでは後衛に位置づき、寒い冬のサ

サッカーではゴールキーパーをやらされ、バスケットボールではだれからもボールを渡してもらえず、走高跳では、一、二回跳んで、あとはしだいに高くなっていくバーを横目でながめているだけ、ソフトボールではライトを守って、打順はビリ、ということを数限りなく目撃してきた。」(『近代スポーツ批判』以下「近」と略す。五三頁)

又、スポーツ界でも、「スポーツ」は「競争をより激化させる方向性」(『近』一三頁)をもって進行しており、人間のなものの否定状況は、円谷選手の自殺に現われている。そして「スポーツの勝敗が、より高い技術で行なわれれば行なわれるほど多数の人々——国民は、スポーツを見る側にまわって、自ら汗をかいてスポーツを行なおうとはしなくなり、スポーツはますます人々から遊離し、隔離した存在」となり、「見られる位置に置かれることになったスポーツは、しだいにシヨウ化し、プロ化していっそう国民から遊離していく」(『近』四七頁)ようになっていく。

そして、このような状況が生み出される根拠を文化としての「スポーツ」それ自身に求め、次のように説明する。

「まさしく人間が自らの手でつくり出した文化を享受する中における疎外の実態があると考えてよいのではなからうか。つまり、競争をし、勝利をわが手中に収めたいということが先行して、人間自身を無視する、あるいは能力による適者生存を是認するという思想や態度が育てられていくのではなからうか。

しかし、もともとスポーツとはそういうものであり、『自然

淘汰説を中心とするダーウィンの学説があらしのような歓迎をうけ、潮のような勢で普及していったのは、イギリス社会の通念であり、他の国々にも存在したところの自由競争によって社会が発達する」(八杉竜一『進化と創造』)というような思想が充満し、指導的な役割を演じた社会に生きた人たちによってつくられたのがスポーツであると考える時、スポーツが本質的に、能力主義的な色彩を濃くもち、現代の人たちがそれを樂しもうとする時、単なる違和感だけでなく、深刻な疎外状況に追いこまれるのは、それゆえに当然といわなければならない。」(傍点筆者。「近」二七頁)「つまり、スポーツは、……近代社会に生きたブルジョワジーたちの思想を内蔵しているがゆえに、本質的に働く人たちを結びつける機能を持ち合せていない」(傍点筆者。「近」五一頁)というのである。

以上、氏の発言から明らかになることは、今日、「スポーツ」をやることは人間的行為であるが、「スポーツ」は、近代社会に生きたブルジョワジーの思想を内蔵しており、それは、自由競争に支えられた、本質的に能力主義的色彩をもったものであり、従って、このような「スポーツ」を行なう現代の国民は、不可避免的に深刻な「疎外状況」に追い込まれる、というのである。ここから氏は、「スポーツ」を、近代市民社会で行なわれていた能力主義に象徴されるどころの「近代的な性格をもった運動の様式をさす」(『近』一四頁)と規定するのである。そして、「スポーツ」と呼べるものは、具体的には、次のような特徴をそなえていなければならないとして「①身体的な訓練をふ

くむもの、②勝敗のあるもの、③精神的な訓練をふくむもの、④やれば楽しいもの、⑤ルールがあるもの、⑥大きな(全国的あるいは国際的)組織をもっているもの、⑦フィクション性があるもの、⑧近代的な合理主義思想をふくんでいるもの(『スポーツとは何か』、以下「ス」と略す。七三―三七頁)をあげ以上のような特徴をもたないものは、「べつの名でよぶ」(「ス」七七頁)ことを提案している。

かくして、「スポーツ」≡「近代スポーツ」として定式化される。

二 「スポーツ」をこのように捉える根拠はどこにあるか

「スポーツ」とは「近代的な性格をもった運動の様式」つまり「近代スポーツ」として規定する根拠は、「スポーツ」に内在する人間疎外」の克服という研究方法と、このことの中に体育教育の本質をみる氏の体育教育観に根ざしている。氏は、体育教育の本質を、運動文化の追求・獲得・創造にあると捉える。すなわち「運動文化を獲得しようとしていく過程において、それ自身がもっている思想性、精神性、かつ階級性が体得され、人間形成が実現されるということが明らかであるという把握、および、現代社会において真に求められるべき人間像として『能力主義』を是認する、或はそれに便乗、それをより厳しいものにしていくこうとするものであってはならないという把握」があるからである。「すなわち運動文化そのもののもっている

思想性、精神性、かつ階級性にまでふれ、自分たちの考えている運動文化というものは、こういうものであってほしいという要求を盛り込んだ新しい運動文化を創造していく、そして、それを学習していく中で新しく創造された運動文化の思想性、精神性を獲得していき、かつ真に現代社会の要求している人間になっていくということが、今日の体育実践において必要であると考え」(『運動文化論』8―運動文化と人間形成―その二―)『体育科教育』一九六五年五月号。以下「運」8。六八頁)からであるという。このことを実現するためには、学習の対象である「スポーツ」を、いわゆる「近代スポーツ」だけに限定して捉えることが必要になってくる。氏は次のようにいう。

「私たちは、スポーツという用語の中へ、あれもこれと投げこんで、かえってスポーツとは何かということを指導しにくくしていることはないだろうか。古代ギリシヤの戦車競技もスポーツなら、やぶさめもスポーツであり、ラクビーもスポーツであると考えがちである。……私はむしろ逆に、それぞれのちがいははっきりさせることによってそれらの文化的価値、あるいは教育的価値を意図的に学習しようとする態度を期待できるのではなからうかと考える。……(運動文化)のそれぞれの特徴の中に、人間の営みがさまざまな形をとって含みこまれているものであり、体育の指導というものは、そのことをも指導しなければならぬ、……そうすることによって、人間は単に生物的に運動欲求を満足させるためにのみ運動するのではなく、歴史的・社会的人間として運動文化に働きかけるものであるとい

うことも指導できるのではなからうか、(「実践における主な課題について」『体育科教育』一九七三年十二月号三七頁)と。

このことの中には、「スポーツ」という運動文化が、その時代の政治、経済、社会、思想等々の諸状況と深く関係して存在しており、「スポーツ」の存在とかわる社会構造のトータルな把握があつてはじめて、「スポーツ」という文化に内包されている矛盾、「人間疎外」も直視され、発見されていくという認識がある。従つて、研究方法においても、「スポーツ」による「人間疎外」の質的変化の過程、そのよつてきたる所以を明らかにすることが中心課題として設定される。そして「この疎外の根源が、とくに十八世紀以降におけるイギリス社会の思想的基盤、ならびにそれを背景としてなしとげられた封建的運動文化の変容」近代化にあると考へ(「運」8。六六頁)られる。このように、「スポーツ」に内在する「人間疎外」の克服が新しい運動文化の創造を意味しており、従つて、この「疎外」の究明を中心的な課題とし、その根源を「スポーツ」の近代化の過程に求めていくという研究方法からいっても、「スポーツ」を「近代的な特徴をそなえた」いわゆる「近代スポーツ」に限定して捉へることが必要であつた。

三 スポーツ変革の方向

こうして「スポーツそれ自身が基本的にもつてゐる矛盾」(『ビジネスマンの体力』以下「ビ」。一八四頁)の克服が、スポーツ変革の方向として追求されることとなる。

矛盾を克服していく上での基本的な視点は、より質の高い「喜び」を「だれもが」体感できるようにするにはどうするか、という点である。氏によるとそれは「スポーツのどのような部分を、どのように変革していけば、より多くの国民が早く『喜び』を味わえるようになり、より質の高い『喜び』を体感できるようになるか」という課題こそが、スポーツを変革し、新しい運動文化の創造に発展していくものである(「近」一七三頁)と。

ところで、「スポーツ」それ自身の中で、「喜び」や「楽しさ」を「だれもが」体感することを阻んでいる条件は、ルール、技術体系、練習方法、マナー、アマチュアリズム等々ある。その中で、とりわけ皆がうまくなるための技術およびその学習体系の矛盾の克服が重要な課題として措定される。すなわち、「スポーツの中に潜在する能力主義的思想とそれをより尖鋭化させる技術およびその学習体系の矛盾を鮮明にし、それを克服していこうと努力することが極めて重要な課題となる」(「運動文化論」9「技術と学習体系」『体育科教育』一九六六年一月号、六八頁)と。というのは「だれもがスポーツにある程度まで習熟し、そのスポーツのおもしろさを味わい」と(「近」九〇頁)なくして、「スポーツ」のもつ矛盾、「人間疎外」条件などを感じとることはできないからである。

しかし、「だれもが」という課題は、「スポーツそれ自身が基本的にもつてゐる矛盾」(「ビ」一八四頁)の存する限り、解決を見ることはできないという。そこで「スポーツ」それ自身

のもつ基本矛盾の捉え方が問題となる。

この矛盾を「大衆化」という観点から氏は次のように説明する。「大衆化は、単なる量的なスポーツ人口の拡大を望む『普及』を第一義的なものとしながら、まさにそれがスポーツであるがゆえに、一人ひとりの技能の質的な『向上』を無視することができず、それを主要な目的とせざるをえないことによって、大衆化の阻害の方向へと転化するのである。なぜなら、スポーツをする上で技能『向上』の意欲を押しつづすことは誰にもできず、むしろ、この技能『向上』の意欲によってスポーツ活動は支えられているとあってよい。したがって、一人ひとりの運動能力の全面的開花を押しとどめることはできず、しかも人間である以上、そこに遅速、高低の差異が生じるのは当然であるから、常に一方では、次々と大量のスポーツ活動への参加者を生産しながら、他方では次々と脱落者もしくは疎外者を生み出していかざるをえない」(『ビ』一四七頁)と。すなわち、氏は「競争」という「形式」による能力の格差づけによる脱落者、疎外者の産出というところに「基本的な矛盾」を認めているということができるのである。

さてそうすると、この「基本的な矛盾」の解決のためには、能力主義の発現形態である「競争」という「形式」を何とかしなければならぬということになる。

氏は、「スポーツ」の具体的な変革の方向を次の三点にまとめている。すなわち「第一に、競争がないわけではないが、競争の形式と競争の結果に対する評価とが大きく変わる文化が形成

されていくであろうと思われる。第二に、だれもが喜んで運動し、満足が得られる運動文化の創造活動が展開されるであろうと思う。その時には、スポーツなどという近代的な名称は消えて別の呼び方になっているであろう。第三に、うまいものとはたなものと差が小さく、だれでもがうまくなっていけるような学習の体系と指導者が用意されていくであろう。施設・用具についてはもちろんである」(『近』五六頁)。

いうまでもなく問題は、第一の変るであろう「競争の形式」であるが、氏によるとそれは次のようにイメージされている。すなわち、あたかもマス・ゲームのようなものであるとして「マス・ゲームには主役も脇役もない。あるものは、全員がそれぞれのパートを受け持ち、全体としてのモチーフを表現しようとするだけである。ここにはエリートも非エリートもない。それでいて繊細だが、しかし力強さを、ひとりひとりで不充だが全体としてはすぐれた思想をりっぱに表現している。スポーツの変革過程においてこのようなことが不可能だと断定することはできないように私には思われる」(『近』五八頁)と。あるいは又「少なくとも今日のような試合とは大きくその姿を変えるであろうし、どちらかというと『学会』のような形になるのではないかと考えられる。もしそうならば、試合の相手は敵ではなく、共通の課題を追求する研究者仲間ということになる」(『ビ』六五頁)と。

さて、このようなかたちで、「スポーツ」は果して止揚されるであろうか。

四 方法上の成果と問題点

まず、方法上の成果を要約的に述べるならば、およそ次のようにいうことができる。

それは第一に、徹底的に、へたな者の立場あるいは国民の立場に立ち、「スポーツ」それ自身に内在する「人間疎外」状況に鋭く目を向け、これを変革の契機として捉えた点である。つまり、「スポーツ」の変革過程を、「スポーツ」それ自身に内在する矛盾の発見とその克服の過程として捉えた点である。

「矛盾の発見とその克服」、この具体的成果として、われわれは、「だれもが」うまくなり、「スポーツ」の「喜び」が体感できるような技術体系の変革と創造が着実に進展している状況を見ることが出来る。水泳における「ドル平泳法」はその典型的な所産であろう。

第二に、この「矛盾」の生み出される根源が、「スポーツ」の成立した時代の社会思想と、「スポーツ」の担い手の思想に求められるということを明らかにした。つまり、「スポーツ」という文化もまた、その時代の歴史的・社会的現実との深いかわり合いの中でしか存立しえなかつたことを明らかにした点である。このことよって、「スポーツ」という文化を歴史的社会的の総体の中で論究していく視点が確立されたということが出来る。

そして第三に、「矛盾の発見とその克服の過程」を主体的人間が形成されていく過程として、いいかえれば、「スポーツ」

の変革を人間の変革との統一の中で捉えたという点である。このことよって、「スポーツ」の変革の方向が、国民的立場から求められるべき現代の人間像との関係の中で、更には、平和、幸福実現といった社会発展の方向の中で追求されていかなばならないという視点が明確にされた。

次に、問題点の第一は、「スポーツ」それ自身に内在する矛盾」における基本矛盾の捉え方である。氏の矛盾の構造をあらためて簡単に図式化すると、スポーツの担い手は近代ブルジョワジー——自由主義思想を内蔵——能力主義的な競争の形式をとる——脱落者を産出——「人間疎外」に追い込む——というものであり、スポーツにおける競争⇨勝敗の形式を基本矛盾として捉えていた。確かに、ルールや技術体系などは、このことに規定されている。氏が、スポーツの変革さるべき方向の第一に、競争の形式をあげているのは、従って極めて当然のことである。

しかし私は、スポーツにおける競争の形式(オリンピックの標語にある「より速く、より高く、より強く」をめざして人間の能力を競う形式)は、技術を中核としている「スポーツ」という文化の発現の基本形式であり、この形式を中心に「スポーツ」は発展の自己運動を展開していると考ええる。つまり、この形式は、スポーツ技術の高まりが、社会関係の中に投げ込まれた時に必然的に現われる表現形態なのであって、スポーツ技術の高まりがある限り存在し続けるものなのである。「スポーツ」技術は、科学・技術の進歩、人間の諸力の発展と共に無限に高まっていく。「スポーツ」技術の高まりを求める人間の精神は、

人間能力の発展、人間的自由の拡大を求める精神であり、それは、社会の進歩と発展を求める精神でもあるからである。

問題は、競争の形式にあるのではなく、真の意味での平等の条件の下での競争が行なわれていないという点にある。その意味で、基本矛盾は、競争の内容とそれをめぐる人間関係にあるとみるべきである。今日行なわれている競争が、生活条件を全く考慮に入れていないことから見ても、名目上平等である競争の形式が如何に不平等なものであるかが納得されるであらう。

真の意味での平等の条件の下での競争こそ追求されていかねばならないものである。競争という形式の否定は、「スポーツ」という文化の全面否定に道を開く危険性をもっているからである。

問題点の第二は、「スポーツ」という文化の継承すべき価値を明確に捉えているかどうかという問題である。

氏の新しい運動文化創造の方法の柱は、「スポーツ」に内在する矛盾の発見とその克服にあった。一面でこのことは不可欠なことであったが、その反面において、同時に、「スポーツ」という文化の進歩性が、現代的意味が、自覚的、積極的に捉えられていたかどうか問題であった。何故なら、過去の文化の否定ではなく、蓄積の上に、その発展として、「スポーツ」を継承し、発展させていくということは、継承し、発展させるべき文化的価値を主要な側面として捉えるということにはほかならないからである。こうしてはじめて、「スポーツ」のもつ進歩性は更に豊かに発展していくことになるのである。

ところが、これまでの氏の発言からは、「スポーツ」に内在する矛盾を見つめようとするあまり、「スポーツ」のもつ進歩性やその現代的意味、つまり文化的価値に対する自覚的・積極的評価、従って理論的総括が欠けていたように私には思えるのである。

たとえば、近代ブルジョワジーによって担われた「スポーツ」の中に、彼らの萌えいづるヒューマニズムに支えられた近代市民精神・自由と平等の精神はなかったであろうか。一個の自由な人間として、対等、平等に能力を競い合おうという「スポーツ」のもつ基本精神自体、形式民主主義思想として、すぐれて進歩的な意味をもつものではなかったか。これら「スポーツ」の中にある民主主義的精神はそのまま現代に生き得るのではないだろうか。又生かす努力こそ重要なのではないだろうか。今日、方法上の主要な課題は、「矛盾」の反面にある「文化価値」を正しく把握し、豊かな内実を付与していくことにあるといえよう。

問題点の第三は、「スポーツ」における「よろこび」の普遍の実体は何かという問題である。

「スポーツ」における矛盾（「人間疎外」の克服とは、「スポーツ」を行なうことによって「だれもが」「よろこび」を高めることができるような状況の実現をいう。その意味で「よろこび」は「人間疎外」を規定している決定的なメルクマールとして捉えられている。ところが、「よろこび」という概念は、人間主体に属する極めて主観的・観念的なものであるから、こ

れを客観化し、普遍の実体として捉えねばならない。何故なら、「スポーツ」を行なうことによって、「よろこび」というかたちで現象しているものの普遍の実体こそ継承・発展すべき文化価値であるからである。

人間主体に属する「よろこび」の普遍の実体を明らかにするためには、人間の本質との関係、つまり、人間労働との関係で明らかにしなければならない。また、「人間疎外」という概念についても同様である。この概念自体、厳密には、人間が自己の本質（自己の類的本質）を自分のなかから外に出して自分に対置させるという意味であり、人間労働との関係を抜きにして語ることはできない。

しかしながら、氏にあっては、「スポーツ」を止揚する上での中核となっている「よろこび」、「人間疎外」といった概念が労働との関係をふまえて用いられていないため、客観的な意味が付与されていないのである。

問題点の第四は、「方法論」上の自覚の問題である。

「近代スポーツ」を「批判」するということの中には既に

「新たな運動文化」を「創造」していくという課題が前提とされている。課題が厳然と存在するということは、実現のための「方法」が要求されているということでもある。そして課題の実現は、「方法」に決定的に依存している。

氏は確かに、「矛盾の発見とその克服」というすぐれて方法的な観点を提起した。しかしそれは、まだ一般的な方法の適用に終っていた。実は、今日求められているものは、「スポーツ」という文化の個別具体的な「方法論」の確立なのである。そのためには、一方では、「スポーツ」を文化として捉え、その止揚を試みた先達の「方法」についての総括がなされねばならず、他方では、「スポーツ」以外の他の文化の止揚の「方法」の検討の中で、「スポーツ」の「方法」の独自性が明らかにされていかねばならないであろう。氏にあっては、残念ながら、これらの検討はなされてはいなかった。

以上、新たな運動文化創造の方法論の確立のための問題提起として、粗削りなスケッチを行なわせていただいた。

(一橋大学助教授)